

井田いきいきタクシー活性化プラットフォーム(島根県大田市)

「小さなビジネス」や「仕送りサブスク」など独自の取り組みで暮らしを守るエコシステムをつくる

INTERVIEW



乗り合いタクシーのサービス改善へ

島根県大田市(おおだし)温泉津町(ゆのつまち)の井田地区は人口490人、高齢化率54%という中山間地域だ。役場支所や金融機関、学校など地域外に出かけるには、市の生活バスや民間のバス路線があるものの、本数が少なく利便性が低いため、2019(令和元)年からAI配車システムによる定額乗合制の「井田いきいきタクシー」の運行を開始した。その後、当初運行委託していたタクシー事業者が廃業し、2022(令和4)年4月からは井田いきいきタクシー運営協議会が立ち上げられ、自家用有償運送事業として運行している。

「地域内は自宅まで迎えに行きますが、地域外の行先では駅やバス停、商業施設、地域支所、歯医者、金融機関、道の駅、温泉街入口など、需要の多い場所に乗降場を設定しています。当初は4人乗りの車両で運行していました

が、地域イベントなどの開催時には輸送力が足りないため、2022(令和4)年10月からは7人乗りの車両を導入しています」(株式会社バイタルリード新規事業推進室 森山日向子氏)。利用者はスマホを持たない高齢者が多いため、予約は電話が中心で、他業務の合間に予約受付を行う協議会職員の負荷が大きかったことから、本実証実験ではアプリを使った「代行予約」の仕組みを構築した。

「JA、歯医者、地域支所の3カ所にタブレットやPCを設置して、職員が利用者の代わりにログインして予約を代行する仕組みです。歯医者の予約を取る際に合わせて配車の予約もするイメージです」(森山氏)

温泉津駅方面へはいきいきタクシーや生活バスを利用する一方、井田地区から市外の江津市方面へ買い物等で出かける機会も多い。本実証実験では井田いきいきタクシー会員を対象とし

て、いきいきタクシー利用の際に使用できる石見交通の路線バスの割引チケットの発行と組み合わせることで、既存路線バスの利用者を増やす試みもされている。

収益を確保してエコシステムを回す本実証実験の大きな目的は、暮らしを守り続けるためのエコシステムの構築にあり、収益の確保が重要になる。その方法のひとつが、2022（令和4）年1月に立ち上げられた「企業組合井田屋」との連携だ。

「いきいきタクシーは月額3,300円の定額制ですが、年金世代にとっては決して安くはない額です。そこで、高齢者が『稼ぐ』場をつくるために、令和元年から小さなビジネスづくりに取り組んできました。現在は井田屋として地域の企業からの仕事を受けたり、手づくりの工芸品や焼肉のたれなど特産品をつくって販売したりすることで収益を上げています。ここで出た利益を交通の維持存続に活用しようという取り組みです」（森山氏）。

さらにユニークな試みが、都会などで離れて暮らす子ども世代が、井田地区で暮らす親のサ

ブスク料金を負担する「仕送りサブスク」だ。「離れていても親孝行ができる仕組みです。通常のサブスクに加えて、5,000円で半年に1度地域特産品を送付するプランも用意しています。現在、温泉津ふるさと会関西支部などを通して、井田に縁のある人への周知を行っています」（森山氏）。

さらに今後は、実家が既になく地域出身者が墓参りなどで井田に来た際に宿泊できる民泊施設の整備も行っていくという。そこで得られた収益も、仕送りサブスクや特産品を扱う井田屋の事業収益などと合わせて、井田いきいきタクシーの維持に充てていくことを予定している。

「いきいきタクシーを利用しながら健康で長生きができる地域をつくっていきたい。もちろん難しい部分もあります。道が狭くて家の前まで車が入れないケースもあります。また『あの人とは一緒に乗りたくない』といった人間関係の問題もありましたが、今ではすっかり仲良くなっています。これも乗り合いの効果ですね。」（井田いきいきタクシー運営協議会 鳶川秀信会長）。

